

母子相互作用場面の観察における 母親の適切な構造化と自発性尊重の検討

— 幼児期の神経発達障害児と定型発達児の母親の比較 —

○ 柏原由貴乃・金平希

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学心理学科)

本研究の目的

本研究では、療育を利用している神経発達障害の幼児を持つ母親の養育行動の特徴を、「親の適切な構造化と限界設定」と「子どもの自発性の尊重」という観点から検討することを目的とする。具体的には、まず、神経発達障害児とその母親の相互作用場面の観察から母親の養育行動を評価し、得られたデータを定型発達児の母親と比較する。また、観察場面ごと（「自由遊び場面」、「片づけ及び課題場面」、「おやつ場面」）の比較も行う。

方法

倫理的配慮 本研究は、福山大学の学術研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（H29-ヒト-10号）。

調査期間及び対象者 本研究で使用したデータは、2018年から2020年にA県のB療育機関のうち、これまで神経発達障害（ASDあるいはADHD）の診断がなされている幼児（平均月齢5.20：SD=0.38，男児2名，女児6名）とその母親8組を対象とした。比較対照群として、2021年にA県のC子ども園及びD児童館を利用しており、これまでに一度も発達の遅れについて指摘されていない幼児（平均月齢4.68：SD=0.57，男児2名，女児7名）とその母親9組を対象とした。

観察場面及び実験用具 研究協力施設の1室にて行った。観察場面は、「禁止場面」、「自由遊び場面」、「母子分離場面」、「片付け及び課題場面」、「おやつ場面」の5つ場面を設定した。その際、母親が子どもと関わっている5分間以上の場面である「自由遊び場面」、「片付け及び課題場面」、「おやつ場面」を評価対象とした。観察室には、実験用のおもちゃ（自由遊び用8種類，設定遊び用1種類）と録画用のビデオカメラ2台を用意した。

調査内容 ①Erickson(1985)を加藤・近藤(2007)が日本語訳した2尺度：母親の子どもへの養育行動を評価「親の適切な構造化と限界設定」・「子どもの自発性の尊重」を用いた。「構造化と限界設定」は、母親が遊び場を構成していくための責任を

持っているか、子どもに応じて必要ならば指導を行っているかどうかの程度を捉える。「自発性の尊重」は、親が子どもの動機や視点、個性を認めることや尊重するように行動する程度を捉える。評価はいずれも「とても低い（1点）」から「とても高い（7点）」の7段階で行い、それぞれの得点が高いほど適切な養育行動を示す。

結果

まず、神経発達障害児と定型発達児の母親における養育行動の比較をするため、場面ごとにMann-WhitneyのU検定を行った。その結果、神経発達障害児と定型発達児の母親の養育行動について、いずれの場面においても有意な差は見られなかった。次に、神経発達障害児と定型発達児の母親における3場面の養育行動を比較するため、Freedman検定を行った（Table1）。その結果、定型発達児の母親のみ「自発性の尊重」においてのみ有意差がみられた（ $\chi^2=13.00$ ， $df=2$ ， $p<.01$ ）。多重比較（Holm法）を行った結果、片付け及び課題場面はおやつ場面と比べ、「自発性の尊重」が有意に低かった（ $p<.01$ ）。

Table1 定型発達児の母親における場面ごとの比較

	自由遊び場面	片付け及び課題場面	おやつ場面	χ^2 値
構造化と限界設定	5 (3-7)	4 (3-7)	5 (3-7)	5.58
自発性の尊重	5 (4-7)	4 (3-6)	6 (5-7)	13.00**

注1) ** $p<.01$ ，* $p<.05$

注2) 中央値（四分位範囲）

考察

本研究から、神経発達障害児は定型発達児と比較して母親の養育行動には差がないことが明らかとなった。一方、場面比較においては、定型発達児の母親のみ片付けや課題作成など母親が指示をすることが求められる場面では、干渉しやすいことが明らかとなった。これより、神経発達障害児の母親は、療育などの支援を通じて適切な養育スキルが身につけている可能性が示唆された。今後は、母親の養育行動に関連すると思われる母子の要因との関係を明らかにする必要がある。